

表一4 粒度組成(重量百分率)

試料番号 粒 径	A線				(水深3m) B線			
	100 m	200 m	300 m	沖	100 m	200 m	400 m	水深13m 沖
1.00~3.00	20.56	47.45	39.99	15.94	19.98	20.67	4.80	3.95
0.38~1.00	34.24	22.79	29.19	12.01	18.52	44.99	38.85	22.62
0.18~0.38	37.40	11.50	14.15	33.43	52.78	25.10	45.15	27.28
0.10~0.18	3.25	2.62	2.69	7.52	3.04	1.84	3.19	11.09
0.10以下	4.55	15.64	14.00	31.10	5.69	7.40	8.02	35.05

A線では300 m附近まで粒径0.4~3.0mmの粗砂の占める割合が高く、51~70%に達する。粒径0.1~0.4mmの細砂の占める割合は14~41%となっていて特に100 m線附近までが高くなっている。A線沖は粗砂28%、細砂41%、泥31%となっており、泥の含有率が高くなっている。

B線はA線とほぼ類似するが、A線より細砂含有率が高くなっている。B線沖は泥の含有率が35%と、ほぼA線沖に類似するが、1~3mmの粗砂含有率がかなり低いのが特徴である。

IV 発育段階別の食物環

ハマフエフキの発育段階別の胃内容物を調査し、その結果を表一5に示した。

1) 当才魚

体長9.5mm以下の幼稚魚の資料が得られず、着底期から9.5mm未満の幼魚の餌料生物については不明である。体長95~145mmの幼魚28個体について調査した。出現した餌料生物は、10月、1月、2月とも、魚類の消化物(骨片、鱗、眼球)の出現が50~100%を占めている。その他、マツバウミジグサ、ウミヒルモ等の頭花植物、ヤムシが僅かに出現した。空胃個体数は、10月には出現しないが、1月には4個体中、3個体、2月には14個体中、2個体出現した。体長95~145mmの範囲では、体長による変化及び季節的な餌料生物相の変化はみられない。

2) 1才魚

6月及び7月に各々3個体、体長は162mm~200mmの範囲である。出現した餌料生物は、当才魚と同様、魚類の消化物が50~100%であった。その他稚イカ、シャコ類の出現がみられた。

3) 成魚

体長33~67.5cmの成魚62尾の調査を行なった。空胃率は17.2~25%であった。成魚の餌料生物相は表一5に示す通り、種類数はかなり多くなっている。

出現頻度の高いのは、魚類、貝類、ウニ類、カニ類の順であった。季節的にみると産卵期に近い3月~4月上旬にかけては、貝類、カニ類及び砂の出現頻度が高いのに比べ、夏期の6月、8月には魚類、ウニ類の頻度が高くなる。ウニ類は3月にも出現するが、春期に出現するウニ類はタコノマクラ目、心形目等の砂質海域に生息する種類である。また、夏期に出現するウニ類は、ナガウニ等のサンゴ礁海域に生息する種類であり、夏期と冬期の移動及び生物相の相違がみられる。